

## 人間健康学部の特徴に対する学生の期待と実感： 1期生と2期生における比較

行實 鉄平<sup>1)</sup>・浦上 萌<sup>2)</sup>・奥野 真由<sup>1)</sup>・大橋 充典<sup>1)</sup>・  
野田 耕<sup>1)</sup>・秦 佳江<sup>1)</sup>

本研究では、人間健康学部の2期生を対象に入学動機に関する調査を実施し、1期生との比較を通して入学期別での特徴を把握するとともに、入学動機をベースとした学部への期待と実感のギャップを分析することで、本学部が目指す「文医融合」教育の暫定的な課題の抽出を試みた。その結果、入学期別の特徴として、2期生は、1期生に比べて明確な動機を持って入学していることが明らかとなった。また、期待と実感の分析結果（不満足項目や潜在的な不満足項目の内容）から、今後、学部全体で取り組むべき課題として、1)「文医融合」教育を感じる数多くの機会の設定や、2)両学科の学生が共に学び交流できる学部共通科目（特に地域フィールドを活用した実習科目等）の開設、3)医学的知識を持った保育士養成プログラムの魅力（教育方針）を伝えていく努力などが提示された。

キーワード：2期生, 入学動機, 期待と実感, 「文医融合」

### **Student's expectation and realization of features in the faculty of Human Health: The comparison between first and second batch of students**

**Tepei YUKIZANE, Moe URAGAMI, Mayu OKUNO, Mitsunori OHHASHI,  
Koh NODA, and Kae HATA**

---

1) 久留米大学

2) 椋山女学園大学

## 1. 背景

わが国における18歳人口は、平成4（1992）年の約205万人をピークに平成30（2018）年では約118万人にまで減少し続けている。一方で、大学進学率（率）は、平成4（1992）年の約54万人（26.4%）から平成30（2018）年は約62万人（53.3%）へと増加している（文部科学省，2018）。

M・トロウ（1976）によれば、高等教育の社会的性格は、進学率の増加に伴い変化することを示唆しており、具体的には、進学率が15%を超えると「エリート型」から「マス型」へ、さらに、50%を超えると「ユニバーサル・アクセス型」へと移行するモデルを示している。つまり、わが国の大学教育の社会的性格は、大学への進学率が50%を超えるユニバーサル・アクセス段階として位置づけることができ、エリート（社会的指導者層）の養成だけではなく、産業社会に適応しうる全国民（一般的大衆者層）の育成にも対応すべき状況に置かれていると言えよう。

ユニバーサル・アクセス段階、いうなれば、多くの国民が大学教育を享受できる「全入時代」における大学教育の多様化は、世界共通の現象であり、わが国においても、中央教育審議会答申（2019）によれば、高等教育が目指すべき姿の1つとして、「高等教育機関がその多様なミッションに基づき、学修者が『何を学び、身に付けることができるのか』を明確にし、学修の成果を学修者が実感できる教育を行っていること。このための多様で柔軟な教育研究体制が各高等教育機関に準備され、このような教育が行われていることを確認できる質保障の在り方へ転換されていくこと」の必要性が示されている。また、育成すべき人材像として、「予測不可能な時代の到来を見据え、専攻分野の専門性を有するだけでなく、思考力、判断力、俯瞰力、表現力の基盤の上に、幅広い教養を身に付け、高い公共性・倫理性を保持しつつ、時代の変化に合わせて積極的に社会を支え、倫理的思考力を持って社会を改善していく資質を有する人材、すなわち『21世紀型市民』が多く誕生し、様々な分野で多様性を持って活躍できること」を示しているが、同時に、こうした人材の育成には、「文理横断的」な教育カリキュラムの実践が必要であることを明記している。

そのような中、2017年度、久留米大学は、総合子ども学科とスポーツ医科学科の2学科から成る人間健康学部を新規開設した。本学部では、学部コンセプト「文医融合」を掲げ、文系学部でありながら医学部との連携・協働による独自のカリキュラムを設定し、学生に幅広い知識と技術を学修してもらえ環境を提供することで、保育や体育・スポーツ分野における専門性の高い人材育成を目指している。いわゆる、「文理横断的」教育カリキュラムへの挑戦と言えよう。また、本学部では、「新設学部における教育評価システムの構築～『文医融合』の学習環境の実質化に向けて～」という「学部教育研究プロジェクト（以下、「学部プロジェクト」とする）」を立ち上げ、本学部が掲げるミッションの成果を「見える化」していく長期的な研究体制を敷くこととなった。つまり、入学時から卒業時までの学修者の「学び」を様々な視点から測定評価していく取り組みである。

その学部プロジェクト初年度、浦上ら（2019）は、学生の入学動機と「学業成績」（渕上，1984）や、「学習態度」（後藤，2003）、「大学生活の充実度」（古市，1993）などの関連性を検討した先行研究を吟味し、さらに、本学部の独自性を測定できる項目を加味した入学動機尺度を作成して、1期生を対象に学生の入学動機を測定・分析した結果、4つの要素からなる入学動機（「内的期待」、「外的期待」、「資格・専門性」、「無目的」）を明らかにした。しかしながら、その後の分析によって、明確な入学動機を持つ学生と持たない学生とが双方に存在することも明らかとなった。また、今後の課題としては、大学生活の中でどのように目的意識が変化していくのか、追跡調査を行うとともに、

新しく入学する2期生との特徴を比較検討する必要性を示している。

続けて、浦上ら（2019）が開発した上記の入学動機項目を参考に、行實ら（2019）は、1期生の入学時における人間健康学部への「期待」と入学後の学生生活を過ごす中で感じている「実感」の各項目を設定し、そのギャップを「Importance-Performance Analysis（以下、「IPA」とする）」を用いて分析した。その結果、全20項目の内、期待と実感ともに高い項目が8項目と多くの項目が確認できた一方で、期待と実感ともに低い項目が7項目と同等数の項目であったことを報告している。また、今後の課題としては、ここで明らかとなった期待と実感が共に低い各項目に応じた対策を講じていくことや、入学期での差異などの継続的な調査が必要性であることを示している。

## 2. 目的

そこで本研究では、学部プロジェクト初年度に実施した「入学動機要素の把握」（浦上ら，2019）および「期待と実感のギャップ分析」（行實ら，2019）の分析手順に従い、新しく入学した2期生を対象にした各種調査を実施し、昨年度（1期生）との比較を行うとともに、入学期別の学生の特徴を把握することで、本学部が目指す「文医融合」教育の暫定的な課題の抽出を試みた。

## 3. 方法

### 3-1. 対象

本研究において調査対象となる第2期生は、139名（総合子ども学科55名：男子15名，女子40名，スポーツ医科学科84名：男子59名，女子25名）であった。ちなみに、今回、比較分析に用いる1期生の回答データ（浦上ら，2019）は、前年度（2017）の調査対象者127名（総合子ども学科49名：男子14名，女子35名，スポーツ医科学科78名：男子49名，女子29名）である。

### 3-2. 調査の実施

2期生への調査は、2018年7月に講義の冒頭で無記名方式により一斉に実施した。質問紙回答前に、著者より調査の趣旨、プライバシーの保護とデータの保管方法、自由参加で不利益防止の配慮等に関する倫理的配慮の説明を行った。その結果、136名（総合子ども学科55名：男子15名，女子40名，スポーツ医科学科81名：男子56名，女子25名）の回答を得ることができた。ちなみに、前年度（2017）の調査対象である1期生の調査は、2017年7月に同様の方法で実施したものを使用した（Table 1）。

また、今後継続的に調査を行う予定であるため、各時点のデータをマッチングするために携帯電話の下4桁の番号を記述してもらい、これにより個人が特定されることはないことを説明したうえで承諾を得られた学生に回答してもらった。なお、本研究は久留米大学御井学舎倫理委員会による審査を受け、承認を得た上で実施している。

Table 1 調査対象者の属性

項目	2期生 (2018年度入学)						1期生 (2017年度入学)					
	全体		総合子ども学科		スポーツ医科学科		全体		総合子ども学科		スポーツ医科学科	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
男	71	52.2	15	27.3	56	69.1	63	49.6	14	28.6	49	62.8
女	65	47.8	40	72.7	25	30.9	64	50.4	35	71.4	29	37.2
合計	136	100.0	55	100.0	81	100.0	127	100.0	49	100.0	78	100.0

### 3-3. 分析（「入学動機」と「期待と実感の差」の把握）方法

まず、浦上ら (2019) において作成された33項目を用いて「入学動機」を測定した。具体的には、自分の興味関心や教養を身に付けることを志向する「得意分野・自己形成」動機 (4項目)、大学生活を楽しむことを志向する「エンジョイ・自己形成」動機 (5項目)、特に目的や動機がない「無目的」動機 (6項目)、学歴等が含まれる「社会的地位」動機 (7項目)、就職したい職業に関係する資格免許や専門性に関わる「資格・専門」動機 (3項目)、自分自身の学力に関わる「偏差値との適合」動機 (3項目)、そして、本学部の特徴である医学部との連携や地域に根差した教育に魅力を感じているというような「本学の独自性」動機 (5項目) に関する項目を設定した (Table 2)。なお、各項目は、「全くそう思わない」から「とてもそう思う」までのリッカート型5段階尺度評定を用いて測定し、その数量化にあたってはそれぞれ1～5までの得点を与え、その結果は間隔尺度を構成するものと仮定した上で、各インディケータの平均点等を算出することで各種分析を進めた。また、入学動機項目 (仮説的入学動機要素の項目: 7次元33項目) に対して因子分析を施し、2期生の特徴を加味した新たな入学動機の要素 (因子) を明らかにするとともに、その因子からクラスター分析により学生の類型化を行うことで各種分析を進めた。

Table 2 入学動機の測定項目 (仮説的入学動機要素の項目: 7次元33項目)

仮説的要因	項目
得意分野・自己形成	Q28. 得意とすることを追求するため
	Q29. 興味のある分野を深く掘り下げるため
	Q15. 知的好奇心を満たすため
	Q25. 自分の才能を伸ばすため
エンジョイ・自己形成	Q33. 青春をエンジョイするため
	Q22. 同じような目的を持った友人を得るため
	Q5. 人生の視野を広げるため
	Q27. 幅広い教養を身に付けるため
無目的	Q7. 自分にあった職業を探すため
	Q16. 両親が勧めるため
	Q12. 親孝行のため
	Q32. 特に目的はない
	Q9. 周りのみんなが行くものだから
	Q4. 自由な時間が欲しいため
Q2. 他にやりたいことがないので	

社会的地位	Q 6. 社会に通用する肩書きが必要なため
	Q24. 就職後、より高い役職に就くため
	Q 1. 就職後、多くの収入・給与を得るため
	Q 8. 高い社会的地位を得るため
	Q19. 就職に有利なため
	Q10. 大卒の肩書きがほしいため
資格・専門	Q21. 高卒では嫌だから
	Q13. 資格を取るため
	Q23. 進学しないと希望の職業の資格が取れないため
偏差値との適合	Q30. 専門的な知識や技術を身に付けるため
	Q18. 自分の学力を考慮したため
	Q11. 入試の難易度を考慮したため
本学の独自性	Q31. 自分の成績にあっていたため
	Q 3. 文系と医系の連携である「文医融合」の学部の魅力を感じたため
	Q17. 医学部があり、医学的な知識も学べるため
	Q20. 学科専門の知識だけでなく、他学科の専門知識も学べるため
	Q26. 地域に根差した教育方針に魅力を感じたため
	Q14. 大学の設備が充実していたため

項目前の番号は問番号

次に、行實ら（2019）の手順に基づき、「入学前の『期待』と入学後の『実感』との差」を分析した。具体的には、上記の入学動機項目（33項目）の中から期待内容に関連する項目（20項目）を精選した。そして、期待と実感を測定するために質問文の末尾を「～するため」（期待測定の場合）と「～できそうだ、～できている」（実感測定の場合）といったようなワーディングを用いた2種類の質問文を作成した（Table 3）。なお、各項目は、「全くそう思わない」から「とてもそう思う」までのリッカート型5段階尺度評定を用いて測定し、その数量化にあたってはそれぞれ1～5までの得点を与え、その結果は間隔尺度を構成するものと仮定した上で、各インディケータの平均点等を算出することで各種分析を進めた。ちなみに、入学前の期待と入学後の実感の各20項目の平均値は、X軸（実感水準）とY軸（期待水準）にプロットしていき、2軸の平均値により区切られた4つの空間領域に分布される項目間の関係を分析（山下，2005）していくことで、今後の「文医融合」教育における課題の考察を進めた（Figure 1）。

Table 3 期待と実感の測定項目

期待項目	実感項目
Q 1. 就職後、多くの収入・給与を得るため	q21. 就職後、多くの収入・給与を得ることができそうだ
Q 3. 文系と医系の連携である「文医融合」の学部の魅力を感じたため	q 2. 文系と医系の連携である「文医融合」ならではの授業に魅力を感じている
Q 5. 人生の視野を広げるため	q11. 人生の視野を広げられている
Q 6. 社会に通用する肩書きが必要なため	q15. 社会に通用する肩書きが得られそうだ
Q 7. 自分にあった職業を探すため	q12. 自分に合った職業を見つけられそうだ
Q 8. 高い社会的地位を得るため	q 6. 高い社会的地位を得ることができそうだ
Q13. 資格を取るため	q19. 希望としている資格が取れそうだ

Q15. 知的好奇心を満たすため	q 5 . 知的好奇心が満たされている
Q17. 医学部があり、医学的な知識も学べるため	q14. 医学部があり、医学的な知識も学べている
Q19. 就職に有利なため	q10. 就職に有利になりそうだ
Q20. 学科専門の知識だけでなく、他学科の専門知識も学べるため	q 8 . 学科専門の知識だけでなく、他学科の専門知識も学べている
Q22. 同じような目的を持った友人を得るため	q 7 . 同じような目的を持った友人を得ることができている
Q24. 就職後、より高い役職に就くため	q17. 就職後、より高い役職に就くことができそうだ
Q25. 自分の才能を伸ばすため	q 1 . 自分の才能を伸ばすことができている
Q26. 地域に根差した教育方針に魅力を感じたため	q22. 地域に根差した教育に魅力を感じている
Q27. 幅広い教養を身に付けるため	q13. 幅広い教養を身に付けられている
Q28. 得意とすることを追求するため	q20. 得意とすることを追求できている
Q29. 興味のある分野を深く掘り下げるため	q18. 興味のある分野を深く掘り下げられている
Q30. 専門的な知識や技術を身に付けるため	q 3 . 専門的な知識や技術を身に付けられている
Q33. 青春をエンジョイするため	q16. 青春をエンジョイできている

項目前の番号は問番号

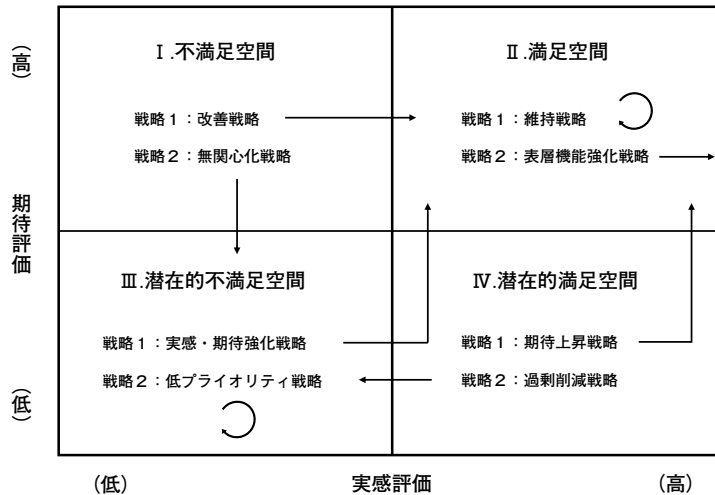


Figure 1 期待と実感の分析フレーム 山下(2005)を修正

## 4. 結果

### 4-1. 2期生の入学動機の構成要素

仮説的入学動機要素の項目（7次元33項目）の測定尺度は、①項目分析、②探索的因子分析、③主成分分析及び信頼性分析を施すことで、2期生の新たな入学動機要素（因子）を明らかにするとともに、その信頼性と妥当性を検証した。

まず、項目分析であるが、7次元33項目の各項目の平均値（M）と標準偏差値（SD）から「天井効果（ $M + SD = 5.00$ 以上）」や「フロー効果（ $M - SD = 1.00$ 以下）」を確認した。その結果、「Q13（5.30）」、「Q23（5.15）」、「Q29（5.16）」、「Q30（5.27）」の4項目において天井効果が見られ、「Q2（0.80）」、「Q9（0.85）」、「Q32（0.66）」の3項目においてフロー効果が確認できた。一般的に両効果

が確認できる項目は、回答の偏りが予想されるため、項目削除の検討対象となる。しかしながら、因子分析を施す前に多くの項目を削除することは様々な項目間の関係性を確認することができなくなるため、本研究では、この中でも唯一0.3以上の高い効果が確認できた「Q32」の1項目をその後の分析から削除することとした。

次に、探索的因子分析（1回目）であるが、入学動機32項目が7次元（因子）構造となるか否かについて検討するために、まず、最尤法のみ（回転なし）を用いて因子数の検討を行った。その結果、第一に、因子間の固有値の差を算出してみると、第一因子と第二因子との差は5.78、第二因子と第三因子との差は1.72、第三因子と第四因子の差は0.17、第四因子と第五因子の差は0.34、第五因子と第六因子の差は0.19であり、第四因子と第五因子の差が前後に比べて大きかった。また、初期の固有値は、第四因子までで累積の分散が52.5%の説明力を有していた。第二に、因子のスクリープロットを見ると、第四因子と第五因子の傾きが大きくなっていることが確認できた。以上のようなことから、入学動機32項目は「4因子構造」からなると仮定することができ、先行研究から得た7次元構造とは異なる結果となった。したがって、その後の分析は4次元構造と修正した上で分析を進めることとした。

次に、探索的因子分析（2回目以降）であるが、4因子構造と仮定した上で、最尤法と斜交回転プロマックス法を使用することで、項目の取捨選択を行った。その結果、「Q1」、「Q7」、「Q8」、「Q16」、「Q18」、「Q19」、「Q20」、「Q24」、「Q25」、「Q31」の10項目は、パターン行列の因子負荷量が4つの因子に対して0.45を下回ることから、削除することとした。そして、最終的な因子構造を確定するために、上記の結果から精選された22項目に対して最尤法と斜交回転プロマックス法を用いた探索的因子分析を実施した。その結果、Table 4に示しているように22項目からなる4因子構造を得ることができた。ちなみに、初期の固有値の全分散は、58.8%の説明力を有していた。

最後に、因子確定後の主成分分析および信頼性分析であるが、Table 4の右側の結果に示しているように、各因子の第一主成分の固有値（1.751～3.131）と分散（40.29%～62.62%）、そして、クロンバック $\alpha$ 係数（0.625～0.849）は、ともに十分な値であったことから、各因子の内的整合性（同一の方向性を持った因子であること）を確認することができた。

以上のような結果を仮説的入学動機要素の項目（Table 2）と比較すると、第一因子は、「Q29. 興味ある分野を深く掘り下げるため」、「Q28. 得意とすることを追究するため」、「Q15. 知的好奇心を満たすため」といった「得意分野・自己形成」動機に関する項目や、「Q30. 専門的な知識や技術を身に付けるため」といった「専門・資格」動機に関する項目、そして、「Q5. 人生の視野を広げるため」といった「エンジョイ・自己形成」動機に関する項目で構成されたことから、大学に入学し自己を形成する中で確かな専門性を身に付けたいとする動機が集約されていると判断し、「専門性」動機と命名した。第二因子は、「Q21. 高卒では嫌だから」、「Q10. 大卒の肩書がほしいため」、「Q6. 社会に通用する肩書が必要なため」といった「社会的地位」動機に関する項目や、「Q4. 自由な時間がほしいため」、「Q9. 周りのみんなが行くものだから」、「Q12. 親孝行のため」といった「無目的」動機に関する項目や、「Q33. 青春をエンジョイするため」、「Q22. 同じような目的を持った友人を得るため」といった「エンジョイ・自己形成」動機に関する項目、「Q11. 入試の難易度を考慮したため」といった「偏差値との適合」動機に関する項目で構成されたことから、大学に入学することで得られる副次的な利益に対する動機がまとまっていたと判断し、「外的期待」動機と命名した。第三因子は、「Q26. 地域に根ざした教育方針に魅力を感じたため」、「Q17. 医学部があり、医学的知識も学べるた

め], 「Q3. 文系と医系の連携である『文医融合』の学部の魅力を感じたため」, 「Q14. 大学の施設が充実していたため」といった「本学の独自性」動機に関する項目や, 「Q27. 幅広い教養を身に付けるため」といった「エンジョイ・自己形成」動機に関する項目で構成されており, その多くの項目が本学の独自性に関する動機で集約されていたことから, 「大学の独自性」動機と命名した。最後に, 第四因子は, 「Q23. 進学しないと希望の職業の資格が取れないため」, 「Q13. 資格を取るため」といった「資格・専門」動機に関する項目や, 「Q2. 他にやりたいことがないため」といった「無目的」動機に関する項目で構成されており, その多くの項目が資格取得に関する動機で集約されていたため, 「資格」動機と命名した。

Table 4 入学動機要素の分析結果

因子名	項目	因子負荷量				固有値 分散 $\alpha$ 係数
		I	II	III	IV	
「専門性」 動機	Q29. 興味のある分野を深く掘り下げるため	1.023	-0.036	-0.192	0.084	3.131 62.62% $\alpha=.849$
	Q28. 得意とすることを追求するため	0.770	-0.051	0.018	0.004	
	Q30. 専門的な知識や技術を身に付けるため	0.661	-0.100	0.030	0.203	
	Q5. 人生の視野を広げるため	0.548	0.128	0.209	-0.183	
	Q15. 知的好奇心を満たすため	0.457	0.298	0.175	-0.086	
「外的期待」 動機	Q21. 高卒では嫌だから	-0.043	0.722	-0.178	0.224	3.627 40.29% $\alpha=.813$
	Q10. 大卒の肩書きがほしいため	-0.284	0.696	0.051	0.088	
	Q4. 自由な時間が欲しいため	0.186	0.687	0.004	-0.192	
	Q9. 周りのみんなが行くものだから	0.019	0.578	-0.068	-0.202	
	Q6. 社会に通用する肩書きが必要なため	0.047	0.542	0.124	0.037	
	Q33. 青春をエンジョイするため	0.199	0.493	-0.025	0.184	
	Q22. 同じような目的を持った友人を得るため	0.232	0.486	0.059	0.072	
	Q12. 親孝行のため	-0.260	0.486	0.301	0.023	
Q11. 入試の難易度を考慮したため	0.134	0.471	-0.278	0.028		
「大学の独自 性」動機	Q26. 地域に根差した教育方針に魅力を感じたため	-0.157	-0.022	0.776	0.039	3.068 61.36% $\alpha=.840$
	Q17. 医学部があり、医学的な知識も学べるため	0.197	-0.162	0.619	0.041	
	Q3. 文系と医系の連携である「文医融合」の 学部の魅力を感じたため	0.237	-0.047	0.601	0.043	
	Q27. 幅広い教養を身に付けるため	0.415	-0.092	0.545	-0.120	
「資格」動機	Q14. 大学の設備が充実していたため	0.115	0.177	0.490	0.238	1.751 58.37% $\alpha=.625$
	Q23. 進学しないと希望の職業の資格が取れ ないため	0.031	0.164	-0.018	0.677	
	Q13. 資格を取るため	-0.007	0.067	0.114	0.643	
	Q2. 他にやりたいことがないので	-0.082	0.461	-0.041	-0.508	
	因子間相関					
	I	1.000	0.284	0.604	0.440	
	II		1.000	0.310	0.178	
	III			1.000	0.378	
	IV				1.000	

因子抽出法: 最尤法

回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

#### 4-2. 入学動機からみる2期生の特徴

浦上ら(2019)の手順を参考に, 上記で明らかとなった入学動機要素(4因子)の関係性をさらに分析していくことで, 2期生の特徴を明らかにすることを試みた。



Table 5は、これまでの入学動機因子による分析から得られた2期生の特徴に、浦上ら(2019)で明らかにされた1期生の特徴を並べて示したものである。この表左上は、入学動機要素(4因子)の平均評定値を算出し、一要因の分散分析によって4因子を比較したものである。その結果、まず、全体の4因子の平均値間には、有意な差があることが確認できた( $F(3, 125) = 83.564, P < .01$ )。また、Bonferroni法による多重比較の結果、「資格」動機(4.09)が最も高く、次いで、「専門性」動機(3.74)、「大学の独自性」動機(3.30)、そして最後に「外的期待」動機(2.72)が位置づけられることが明らかとなった。さらに、学科別では、総合子ども学科は、スポーツ医科学科と比べて「外的期待」動機、「大学の独自性」動機、「資格」動機で高い数値が示され、一方で、スポーツ医科学科は、総合子ども学科と比べて「専門性」動機において、高い数値が示された。

次に、Figure 2は、クラスター分析を施すことによって、入学動機因子の類型化による2期生の特徴を示したものである。入学動機の4因子をz得点に換算し、ward法によるクラスター分析を行った。その結果、クラスター間の特徴が4つの入学動機因子で異なっている4クラスターが妥当であると判断した。具体的には、第一クラスター( $n=82$ )では、すべての動機因子において高い傾向を示していることから「入学期待高」群と命名した。第二クラスター( $n=18$ )では、全ての動機因子において低い傾向を示している中で、特に「資格」動機が低いことから「資格期待低」群と命名した。第三クラスター( $n=17$ )では、「外的期待」動機が低く、それ以外の動機因子は高い傾向を示していることから「内発的期待高」群と命名した。第4クラスター( $n=11$ )では、すべての動機因子において低い傾向を示していることから「入学期待低」群として命名した。また、この4クラスターを学科別での人数比率(Table 5)で見ると、総合子ども学科は、「入学期待高」群(69.8%)と「入学期待低」群(9.4%)の割合が高く、一方で、スポーツ医科学科は、総合子ども学科と比べて「資格期待低」群(17.3%)と「内発的期待高」群(14.7%)の割合が高いことがわかる。

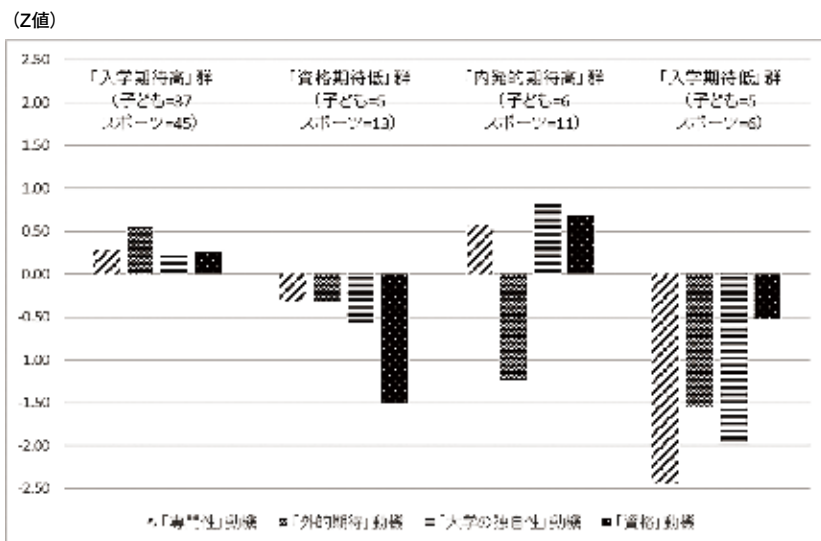


Figure 2 クラスター分析による学生の類型化

### 4-3. 入学期別の比較にみる2期生の特徴

はじめに、Table 5の表上段に示した2期生の入学動機因子は、まず、1期生の「内的期待」動機に含まれていた項目(浦上ら, 2019)が独立した形でまとめ、「大学の独自性」動機として新たに抽出されている。また、1期生においては「資格・専門性」動機としてまとまっていた因子が、2期生においては、「資格」動機と「専門性」動機といった2つの因子として抽出されている。さらに、学科別にみると総合子ども学科は、スポーツ医科学科に比べて4因子の平均値が両年度において高い傾向であることが確認できる。

続けて、Table 5の表下段に示した1期生のクラスター群では、「無目的」群(52.0%)が最も大きな群であったのに対して、2期生のクラスター群では、「入学期待高」群(64.1%)が最も大きな群となっている。また、学科別にみると1期生の「無目的」群は、スポーツ医科学科(59.0%)が総合子ども学科(40.8%)に比べて多くの割合を有していたのに対して、2期生の「入学期待高」群では、総合子ども学科(69.8%)およびスポーツ医科学科(60.0%)ともに多くの割合を有していることが確認できる。

Table 5 入学期別および学科別にみる入学動機因子とクラスター群

		2期生 (2018年度入学)						1期生 (2017年度入学)						
因子	全体		総合子ども学科		スポーツ医科学科		因子	全体		総合子ども学科		スポーツ医科学科		
	M	SD	M	SD	M	SD		M	SD	M	SD	M	SD	
入学動機因子	資格	4.09	0.87	4.20	0.67	4.01	0.98	資格・専門性	4.26	0.63	4.35	0.66	4.20	0.61
	専門性	3.74	0.90	3.64	0.82	3.81	0.95	内的期待	3.48	0.84	3.59	1.00	3.41	0.72
	大学の独自性	3.30	0.99	3.44	1.03	3.21	0.97	外的期待	2.90	0.90	2.98	0.90	2.85	0.89
	外的期待	2.72	0.76	2.80	0.86	2.66	0.69	無目的	2.47	0.78	2.51	0.73	2.45	0.81
クラスター	N	%	N	%	N	%	クラスター	N	%	N	%	N	%	
クラスター群	入学期待高	82	64.1	37	69.8	45	60.0	無目的	66	52.0	20	40.8	46	59.0
	資格期待低	18	14.1	5	9.4	13	17.3	専門性高	29	22.8	12	24.5	17	21.8
	内発的期待高	17	13.3	6	11.3	11	14.7	期待高	18	14.2	12	24.5	6	7.7
	入学期待低	11	8.6	5	9.4	6	8.0	未決定	14	11.0	5	10.2	9	11.5

1期生のデータは、浦上ら(2019)による結果

### 4-4. 「入学期待高」群にみる2期生の期待と実感

行實ら(2019)による手順を参考に、期待と実感のギャップによるIPA分析を実施し、2期生の特徴および課題を明らかにすることを試みた。本研究では、その中でも、入学動機のクラスター分析で抽出された「入学期待高」群( $n=82$ : 64.1%)が最もボリュームのあるクラスター群であったことから、このクラスターに類型化された学生が、大学入学後にどのような実感を得ているのかに焦点を当てて分析を進めることとした。

はじめに、Table 6は、「入学期待高」群に類型化された学生の期待と実感の各20項目の平均点と差を全体および学科別で示したものである。

まず、学部全体の結果であるが、期待よりも実感が高い項目としては、⑫「同じような目的を持つ

た友人を得ることができている」(0.83ポイント), ⑩「就職に有利になりそうだ」(0.30ポイント), ⑳「青春をエンジョイするため」(0.16ポイント)などが挙げられる。一方で, 低い項目としては, ⑦「希望としている資格が取れそうだ」(-0.73ポイント), ⑲「専門的な知識や技術を身に付けられている」(-0.50ポイント), ⑱「興味のある分野を深く掘り下げられている」(-0.38ポイント)などが挙げられる。

次に, 学科別の結果であるが, 期待よりも実感が高い項目としては, 総合子ども学科では, ⑫「同じような目的を持った友人を得ることができている」(1.04ポイント), ⑤「自分に合った職業を見つけられそうだ」(0.43ポイント), ⑩「就職に有利になりそうだ」(0.18ポイント)などであったのに対して, スポーツ医科学科では, ⑤「自分に合った職業を見つけられそうだ」(1.09ポイント), ⑨「医学部があり, 医学的な知識も学んでいる」(0.80ポイント), ⑫「同じような目的を持った友人を得ることができている」(0.71ポイント)などを挙げることができる。一方で, 低い項目としては, 総合子ども学科では, ⑨「医学部があり, 医学的な知識も学んでいる」(-0.72ポイント), ⑲「専門的な知識や技術を身に付けられている」(-0.54ポイント), ⑦「希望としている資格が取れそうだ」(-0.53ポイント)などであったのに対して, スポーツ医科学科では, ⑥「高い社会的地位を得ることができそうだ」(-1.67ポイント), ④「社会に通用する肩書が得られそうだ」(-0.78ポイント), ⑮「地域に根差した教育に魅力を感じている」(-0.84ポイント)などを挙げることができる。

Table 6 「入学期待高」群における期待と実感

加外 番号	期待項目	全体						総合子ども学科						実感項目	スポーツ医科学科						「実感」-「期待」の差		
		全体		総合子ども学科		スポーツ医科学科		全体		総合子ども学科		スポーツ医科学科			全体	子ども	スポーツ						
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD										
①	Q1. 就職後、多くの収入・給与を得るため	3.11	0.98	3.11	1.02	3.11	0.96	q21. 就職後、多くの収入・給与を得ることができそうだ	3.11	0.78	3.06	3.06	3.16	0.56	0.00	-0.05	-0.35						
②	Q3. 文系と医系の連携である「文医融合」の学部の魅力を感じたため	3.66	1.16	3.84	1.12	3.51	1.18	q2. 文系と医系の連携である「文医融合」ならではの授業に魅力を感じている	3.48	0.98	3.39	3.39	3.56	0.92	-0.18	-0.45	-0.26						
③	Q5. 人生の視野を広げるため	3.79	0.93	3.76	0.96	3.82	0.91	q11. 人生の視野を広げられている	3.79	0.86	3.83	3.83	3.76	0.80	0.00	0.07	0.45						
④	Q6. 社会に通用する肩書きが必要なため	3.34	0.92	3.38	1.09	3.31	0.76	q15. 社会に通用する肩書きが得られそうだ	3.21	0.83	3.08	3.08	3.31	0.85	-0.13	-0.30	-0.78						
⑤	Q7. 自分にあった職業を探すため	3.85	0.94	3.57	1.02	4.09	0.82	q12. 自分に合った職業を見つけられそうだ	3.95	0.82	4.00	4.00	3.91	0.76	0.10	0.43	1.09						
⑥	Q8. 高い社会的地位を得るため	2.84	0.91	2.86	0.92	2.82	0.91	q6. 高い社会的地位を得ることができそうだ	2.95	0.88	2.89	2.89	3.00	0.85	0.11	0.03	-1.67						
⑦	Q13. 資格を取るため	4.72	0.48	4.78	0.42	4.67	0.52	q19. 希望としている資格が取れそうだ	3.99	0.81	4.25	4.25	3.78	0.80	-0.73	-0.53	0.09						
⑧	Q15. 知的好奇心を満たすため	3.59	0.85	3.46	0.84	3.69	0.85	q5. 知的好奇心が満たされている	3.65	0.80	3.69	3.69	3.62	0.75	0.06	0.23	0.24						
⑨	Q17. 医学部があり、医学的な知識も学べるため	3.34	1.27	3.30	1.41	3.38	1.15	q14. 医学部があり、医学的な知識も学べている	3.27	1.06	2.58	2.58	3.82	0.75	-0.07	-0.72	0.80						
⑩	Q19. 就職に有利なため	3.16	1.00	3.32	1.08	3.02	0.92	q10. 就職に有利になりそうだ	3.46	0.88	3.50	3.50	3.42	0.89	0.30	0.18	0.31						
⑪	Q20. 学科専門の知識だけでなく、他学科の専門知識も学べるため	3.29	1.02	3.51	1.04	3.11	0.98	q8. 学科専門の知識だけでなく、他学科の専門知識も学べている	3.33	0.96	3.39	3.39	3.29	0.90	0.04	-0.12	-0.04						

⑫	Q22. 同じような目的を持った友人を得るため	3.38	1.00	3.43	1.09	3.33	0.93	q7. 同じような目的を持った友人を得ることができている	4.21	0.82	4.47	4.47	4.00	0.85	0.83	1.04	0.71
⑬	Q24. 就職後、より高い役職に就くため	3.35	0.91	3.43	0.77	3.29	1.01	q17. 就職後、より高い役職に就くことができそう	3.12	0.80	3.08	3.08	3.16	0.77	-0.23	-0.35	-0.57
⑭	Q25. 自分の才能を伸ばすため	3.67	0.88	3.59	0.90	3.73	0.86	q1. 自分の才能を伸ばすことができている	3.40	0.65	3.19	3.19	3.56	0.69	-0.27	-0.40	0.67
⑮	Q26. 地域に根差した教育方針に魅力を感じたため	3.06	1.06	3.27	1.10	2.89	1.01	q22. 地域に根差した教育に魅力を感じている	3.07	0.79	3.31	3.31	2.89	0.75	0.01	0.04	-0.84
⑯	Q27. 幅広い教養を身に付けるため	3.79	0.90	3.86	1.03	3.73	0.78	q13. 幅広い教養を身に付けられている	3.64	0.82	3.72	3.72	3.57	0.76	-0.15	-0.14	-0.43
⑰	Q28. 得意とすることを追求するため	3.87	0.83	3.70	0.97	4.00	0.67	q20. 得意とすることを追求できている	3.69	0.77	3.61	3.61	3.76	0.71	-0.18	-0.09	-0.62
⑱	Q29. 興味のある分野を深く掘り下げるため	4.28	0.74	4.16	0.87	4.38	0.61	q18. 興味のある分野を深く掘り下げられている	3.90	0.82	3.94	3.94	3.87	0.79	-0.38	-0.22	-0.51
⑲	Q30. 専門的な知識や技術を身に付けるため	4.44	0.69	4.51	0.69	4.38	0.68	q3. 専門的な知識や技術を身に付けられている	3.94	0.62	3.97	3.97	3.91	0.56	-0.50	-0.54	0.42
⑳	Q33. 青春をエンジョイするため	3.65	0.99	3.84	0.87	3.49	1.06	q16. 青春をエンジョイできている	3.81	0.94	3.94	3.94	3.71	1.04	0.16	0.10	0.12
期待項目の平均		3.61		3.63		3.59		実感項目の平均	3.55		3.54		3.55				

全体 n=82 総合子ども学科 n=37 スポーツ医科学科 n=45  
項目前の番号は問番号

続けて、Figure 3~5は、期待項目を Y 軸、実感項目を X 軸にした散布図を、学部全体および学科別に「満足・不満足構造 (Figure 1)」で示したものである。

まず、期待が高く実感が低い「Ⅰ. 不満足空間」は、学部全体では②、⑭の2項目がプロットされた。また、学科別では総合子ども学科が②の1項目であったのに対して、スポーツ医科学科が0項目となっている。

次に、期待と実感がともに高い「Ⅱ. 満足空間」は、学部全体では③、⑤、⑦、⑧、⑯、⑰、⑱、⑲、⑳の9項目がプロットされた。また、学科別では総合子ども学科が③、⑦、⑯、⑰、⑱、⑲、⑳の7項目であったのに対して、スポーツ医科学科が③、⑤、⑦、⑧、⑭、⑯、⑰、⑱の9項目となっている。

そして、期待と実感がともに低い「Ⅲ. 潜在的不満空間」は、学部全体では①、④、⑥、⑨、⑩、⑪、⑬、⑮の8項目がプロットされた。また、学科別では総合子ども学科が①、④、⑥、⑨、⑩、⑪、⑬、⑮の9項目であったのに対して、スポーツ医科学科が①、④、⑥、⑩、⑪、⑬、⑮の7項目となっている。

最後に、期待は低く実感が高い「Ⅳ. 潜在的満足空間」は、学部全体では⑫の1項目がプロットされた。また、学科別では総合子ども学科が⑤、⑧、⑫の3項目であったのに対して、スポーツ医科学科が②、⑨、⑫、⑳の4項目となっている。

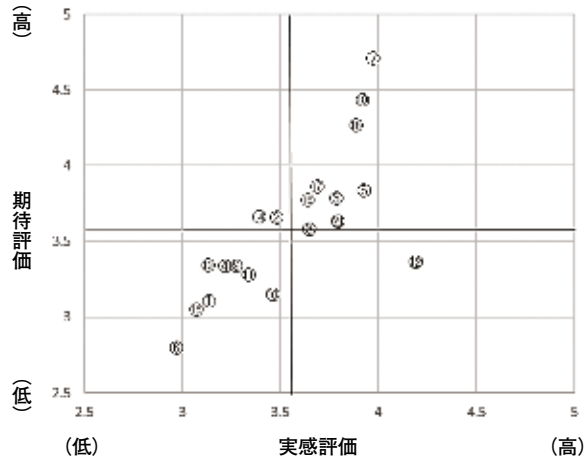


Figure 3 学生（学部全体）の満足・不満足構造

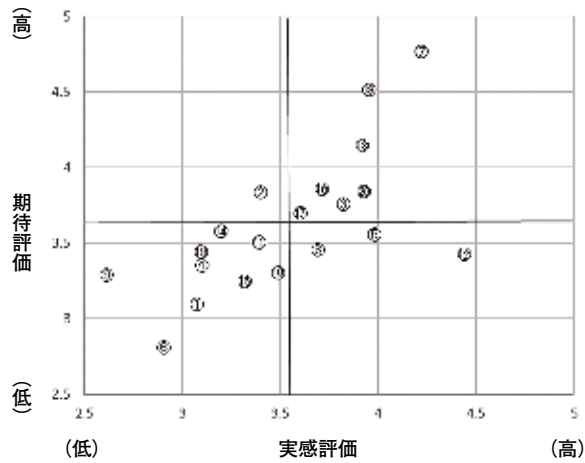


Figure 4 学生（総合子ども学科）の満足・不満足構造

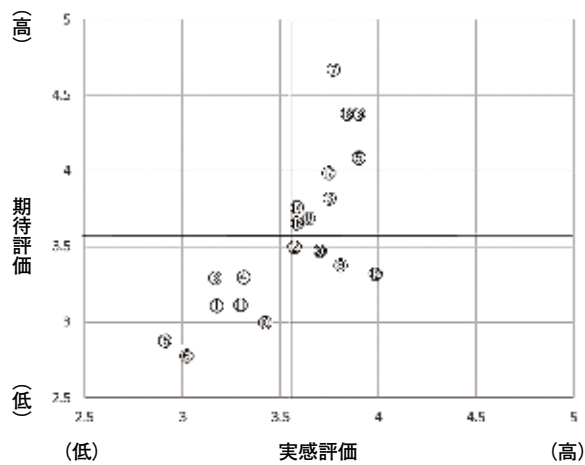


Figure 5 学生（スポーツ医科学科）の満足・不満足構造

## 5. 考察

### 5-1. 入学動機の特徴

本研究では、学部プロジェクト初年度に実施した分析手順に従い、新しく入学した2期生に対して入学動機に関する調査を実施し、昨年度（1期生を対象とした調査結果）との比較を行うことで、入学期別での学生の特徴を把握することを目指した。

その結果、第一に、2期生の入学動機因子は、①「資格」動機、②「専門性」動機、③「大学の独自性」動機、④「外的期待」動機といった4因子構造であることが明らかとなった。また、1期生を対象とした調査結果（浦上ら、2019）での入学動機因子（「資格・専門性」動機、「内的期待」動機、「外的期待」動機、「無目的」動機）と比較すると、「資格・専門性」動機から①「資格」動機と②「専門性」動機が2つの独立した因子として確認できるとともに、「内的期待」動機の一部の項目からまとまった因子として、③「大学の独自性」動機が確認されたことから、2期生は、より明確な目的を持って本学部に入學していることがうかがえる。つまり、人間健康学部が掲げる「文医融合」教育を2期生は1期生に比べてより期待している学生達であると考えることができよう。

第二に、2期生の入学動機因子によるクラスター分析から、(1)「入学期待高」群、(2)「資格期待低」群、(3)「内発的期待高」群、(4)「入学期待低」群といった4つの類型群を示すことができた。また、昨年度の1期生を対象とした調査結果（浦上ら、2019）でのクラスター分析（「無目的」群、「専門性高」群、「期待高」群、「未決定」群）と比較すると、最もボリュームがある類型群として、2期生では、(1)「入学期待高」群（64.1%）が挙げられ、1期生では、「無目的」群（52.0%）が挙げられた。つまり、2期生は、1期生に比べて明確な目的を持って本学部を選択し、入学してきた学生達が多い傾向であることがうかがえる。

以上のことから、入学動機からみる入学期別の特徴としては、1期生においては、人間学部開設初年度の学生達であり、この学部で何ができるかという明確な動機よりも、とにかく新しい学部への期待を持って入学してきた学生達であることがうかがえる。一方で、2期生においては、在校生の声および大学からの様々な情報提供もある程度浸透し、自分自身の目指したいキャリアと、この学部で何が学べるのかを理解した上で入学してきている学生達であると考えられる。

### 5-2. 期待と実感によるギャップの特徴

本研究では、2期生の入学動機因子によるクラスター分析で最もボリュームがあった「入学期待高」群に焦点を当てて、IPAの戦略フレームを援用した実感項目（X軸）と期待項目（Y軸）の2軸による満足・不満足構造（4空間）を示してきた。ここでは、本研究におけるこれまでの結果を踏まえ、今後の「文医融合」教育における暫定的な課題を考察していきたい。

第一に、期待が高く実感が低い「I. 不満足空間」にプロットされた項目についてみていきたい。この空間では、学部全体で「②文系と医系の連携である『文医融合』ならではの授業に魅力を感じている」、「⑭自分の才能を伸ばすことができている」の2項目がプロットされ、総合子ども学科で1項目が同じ空間にプロットされていた。ここにプロットされている項目は、大学教育に対する学生の不満が顕在化されている内容と捉えられるものであり、早急に改善戦略を取ることが必要と考えられるものである。しかしながら、項目②は、期待と実感の差の分析（Table 6）で両学科ともにマイナスの項目であったことを勘案した場合、今後は学部全体の取り組みとして、医学部との連携

による授業内容について、履修ガイダンス等での丁寧な説明を施すことや、キャリアに関する話題を提供するなど、「文医融合」教育を感じる数多くの機会を設定することで学生の実感を高める努力が必要になるといえよう。

第二に、期待と実感がともに高い「Ⅱ. 満足空間」にプロットされた項目についてみていきたい。この空間では、学部全体で「③人生の視野を広げられている」、「⑤自分に合った職業を見つけられそうだ」、「⑦希望している資格がとれそうだ」、「⑧知的好奇心が満たされている」、「⑯幅広い教養を身につけられている」、「⑰得意とすることを追求できている」、「⑱興味のある分野を深く掘り下げられている」、「⑲専門的な知識や技術を身につけられている」、「⑳青春をエンジョイできている」の9項目がプロットされ、総合子ども学科では7項目が、スポーツ医科学科では9項目が同じ空間でプロットされている。学科別で独自にプロットされた項目としては、総合子ども学科で「⑳青春をエンジョイできている」の1項目が、スポーツ医科学科で「⑤自分に合った職業を見つけられそうだ」と「⑧知的好奇心が満たされている」、「⑭自分の才能を伸ばすことができている」の3項目が挙げられる。この空間にプロットされた項目については、学生が現在の大学教育に対して満足を示している内容であることから、特に対策を講じる必要はないと思われるが、学生の実感は常に変化することを勘案した場合、維持戦略として、年に1回程度のモニタリングは必要になるものと考ええる。

第三に、期待と実感がともに低い「Ⅲ. 潜在的不満空間」にプロットされた項目についてみていきたい。この空間では、学部全体で「①就職後、多くの収入・給与を得ることができそうだ」、「④社会に通用する肩書が得られそうだ」、「⑥高い社会的地位を得ることができそうだ」、「⑨医学部があり、医学的知識も学べている」、「⑩就職に有利になりそうだ」、「⑪学科専門の知識だけでなく、他学科の専門知識も学べている」、「⑬就職後、より高い役職に就くことができそうだ」、「⑮地域に根差した教育に魅力を感じている」の8項目がプロットされ、総合子ども学科で9項目が、スポーツ医科学科で7項目が同じ空間でプロットされている。学部全体でプロットされた項目に注目すると、項目①、④、⑥、⑩、⑬は、長期的視点に立った社会的地位獲得への期待内容であることから、低プライオリティ戦略に徹してもよいと思われる。しかし、項目⑨、⑪、⑮は、大学における専門教育の環境整備という観点から、実感・期待の強化を検討しなければならない内容であるといえよう。よって、例えば、項目⑪や⑮の対応としては、現在、学部共通科目は限られており、地域フィールドを活用した実習においても個々の学科で展開するのみとなっていることから、今後は、学部のコンセプトに従い、両学科の学生が共に学び交流できる学部共通科目（地域フィールドを活用した実習科目など）の開設などを検討していくことが必要になるといえよう。また、項目⑨への対応は、「文医融合」教育において重要な観点であることはいままでもない。特に、期待と実感の差（Table 6）においてスポーツ医科学科はプラスであったが、総合子ども学科はマイナスであったことから、医学的知識を持った保育士養成は、他大学にはない魅力的な教育（方針）プログラムであることを今後は学生達に伝えていくより一層の努力が望まれよう。

第四に、期待が低く実感が高い「Ⅳ. 潜在的満足空間」にプロットされた項目についてみていきたい。この空間では、学部全体で「⑫同じような目的を持った友人を得ることができている」の1項目がプロットされ、総合子ども学科で3項目が、スポーツ医科学科で4項目が同じ空間でプロットされていた。学科別で独自にプロットされた項目としては、総合子ども学科で「⑤自分に合った職業を見つけられそうだ」、「⑧知的好奇心が満たされている」の2項目であり、スポーツ医科学科

で「②文系と医系の連携である『文医融合』ならではの授業に魅力を感じている」、「⑨医学部があり、医学的な知識も学んでいる」、「⑩青春をエンジョイできている」の3項目となっている。ここにプロットされた項目は、学生が期待以上に満足している内容であり、特に学生ニーズに反して過剰に提供していると思われる内容でない限り、現状を維持できることが重要になるものである。総合子ども学科では、保育士養成に関しては期待以上に実感を持って教育プログラムを評価しており、スポーツ医科学科では、期待以上に医学部との連携による「文医融合」の教育プログラムを評価していることがうかがえる。また、この空間でプロットされた学部で共通した項目⑫から、学生同士の交流が期待以上に活発であることもうかがえる。今後は、このような潜在的な学生ニーズへの把握と対応に学部全体で取り組むことが求められよう。

Table 7 学部全体および学科別にみる満足 - 不満足空間の各項目プロット状況

	I. 不満足空間	II. 満足空間	III. 潜在的な不満足空間	IV. 潜在的な満足空間
学部全体	②, ⑭	③, ⑤, ⑦, ⑧, ⑯, ⑰, ⑱, ⑲, ⑳	①, ④, ⑥, ⑨, ⑩, ⑪, ⑬, ⑮	⑫
総合子ども学科	②	③, ⑦, ⑯, ⑰, ⑱, ⑲, ⑳	①, ④, ⑥, ⑨, ⑩, ⑪, ⑬, ⑭, ⑮	⑤, ⑧, ⑫
スポーツ医科学科		③, ⑤, ⑦, ⑧, ⑭, ⑯, ⑰, ⑱, ⑲	①, ④, ⑥, ⑩, ⑪, ⑬, ⑮	②, ⑨, ⑫, ⑳

## 6. 今後の課題

本研究では、学部プロジェクト初年度に実施した分析手順に従い、新しく入学した2期生を対象に入学動機に関する調査を実施し、1期生との比較を通して、入学期別での特徴を把握した。その結果、2期生は1期生に比べてより明確な動機を持って入学してきた学生であり、学部が掲げる「文医融合」教育に高い期待を持っていることを明らかにすることができた。また、学生の入学時における期待と入学後の実感とのギャップ分析により、不満足空間や潜在的な不満足空間にプロットされた項目から、学部全体で取り組むべき課題として、1)「文医融合」教育を感じる数多くの機会を設定することや、2)両学科の学生が共に学び交流できる学部共通科目（特に地域フィールドを活用した実習科目など）の開設。総合子ども学科で取り組むべき課題としては、3)医学的知識を持った保育士養成プログラムの魅力（教育方針）をより一層伝えていく努力、などを提示することができた。このように医学的知識を兼ね揃えた保育士養成ならびに体育・スポーツ指導者の養成といった、いわゆる、「文医融合」教育による「文医融合」人材の養成は、本学部が目指すべき学生像であることを再認識することができたといえよう。

しかしながら、本研究における結果は、各入学期における1年次を対象としたデータを分析したに過ぎない。よって、本学部が掲げる「文医融合」教育プログラムの履修を進める中で、学生の实感評価がどのように変容しているのか、いわゆる、「学び」のプロセスを分析していくことが今後は必要になると考える。さらに、本研究における研究方法は、学部プロジェクトの初年度に実施した浦上ら（2019）および、行實ら（2019）の分析手順を援用した。よって、入学動機の各種分析における命名をはじめ「文医融合」教育の課題抽出など、妥当性・信頼性の課題、つまり、研究方法の精緻化は、今後に残された課題と考える。



## 文 献

- 文部科学省 (2018) 平成30年度学校基本調査. [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k\\_detail/1407849.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1407849.htm) (閲覧日: 2019.12.2).
- M・トロウ (1976) 高学歴社会の大学. 天野郁夫, 喜多村和之訳, 東京大学出版会: 東京.
- 中央教育審議会答申 (2019) 2040年に向けた高等教育のグランドデザイン. [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1411360.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1411360.htm) (閲覧日: 2020.3.22).
- 浦上萌, 奥野真由, 行實鉄平, 野田耕, 秦佳江, 大橋充典 (2019) 大学進学動機と学部の独自性との関連: 文医融合学部に所属する大学生に着目して, 久留米大学人間健康学部紀要, 第1巻, 1-10.
- 行實鉄平, 浦上萌, 奥野真由, 大橋充典, 野田耕, 秦佳江 (2019) 学生による新設学部への期待と実感: Importance Performance Analysis を用いて, 久留米大学人間健康学部紀要, 第1巻, 27-39.
- 潤上克義 (1984) 進学志望の意思決定過程に関する研究. 教育心理学研究, 32(1): 59-63.
- 後藤宗理 (2003) 大学生における進学動機・自己意識・社会意識: 専攻分野の比較. 名古屋市立大学人文社会学部研究紀要, 15: 1-18.
- 古市裕一 (1993) 大学生の大学進学動機と価値意識. 進路指導研究, 14: 1-7.
- 山下秋二 (2005) 図解スポーツマネジメント. 大修館書店: 東京.

## 付 記

本研究は、平成31 (2019) 年度久留米大学副学長裁量教育研究支援「人間健康学部における教育評価システムの確立」の調査結果の一部を用いたものである。

(2020.3.25. 受理)